

排水施設をもった大型住居

(財)京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館



写真1 排水施設と大型住居 (北東から)

はじめに 向日市と接する京都市南区久世殿城町^{とのしろ}では、向日町上鳥羽線の街路建設工事が進行中です。これに先だって1997年からこの地域では発掘調査を行ない、現在も継続しています。1998年度は国道171号線から東へ約230m付近までが調査対象となりました。



図1 調査地周辺

この地図は、京都市長の承認を得て京都市発行の市街図(縮尺:1/25,000)を複製して調製したものです。

久世殿城町一帯は、中久世遺跡と大藪遺跡とに含まれ、縄文時代から室町時代に至る複合遺跡です(図1)。大藪遺跡では、これまでに弥生時代の南流する用水施設をもつ大きな河川と柱根の残る大型竪穴住居が見つかっており、弥生時代後期には集落が営まれていたことがわかっています。

主な遺構 弥生時代後期の遺構として、調査区のほぼ中央に北から南西方向に湾曲しながら延びる溝を検出しました。その溝の西側には大型方形竪穴住居と円形竪穴住居があり、東側には方形周溝墓がありました(写真1・図2)。竪穴住居のある部分を集落とすると、溝は集落を囲む環濠と考えら

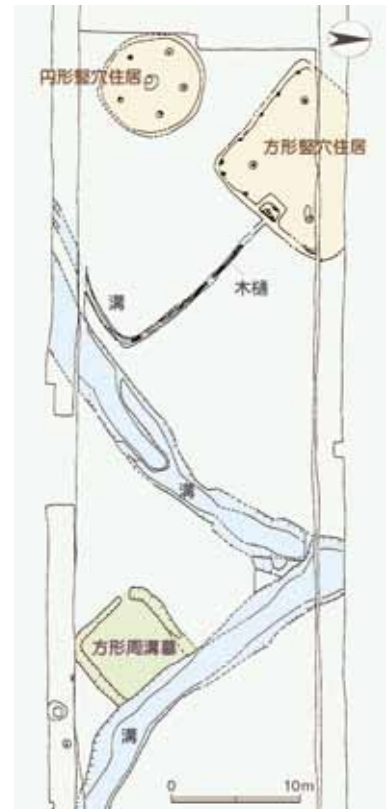


図2 調査区の平面図



写真2 竪穴住居の主柱根

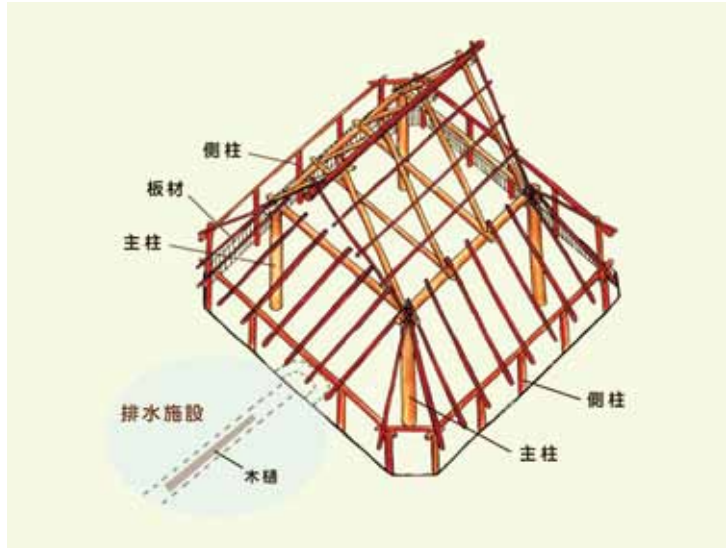


図3 竪穴住居の推定図 (川上 貢 案)



写真3 壁溝に残る板材と側柱跡



写真4 排水施設

れます。そして東側は方形周溝墓があることから墓域とみられます。遺物は比較的少なく、溝や方形周溝墓からは弥生時代後期の土器(壺・甕・高杯)、木製品(鋤)、住居跡からはガラス小玉などが出土しています。

大型住居跡 今回発見した大型の竪穴住居は南半分の確認にとどまりましたが、隅丸方形で一辺の長さ約11m・床面積120㎡と推定できます。床には主柱根が2箇所残存しており、その直径は30cmを越えます(写真2)。住居内の壁溝には埋め込まれた板材の一

部が残存しており、壁面の崩壊を防ぐために板を当てていた状況がわかりました。また、その内側には約2mの間隔で側柱が並んでいます(写真3)。南東辺のほぼ中央には壁際に土壌があり、その土壌からは溝が住居の外側に延びています。溝の底には丸太を半裁して、内側をくり貫いた幅30cm・長さ約4mの木樋が埋め込まれており、この溝は暗渠であることがわかりました(写真4)。

調査の成果 今回の成果は、弥生時代後期の集落が墓域と共にみつかったことです。また、方形の

竪穴住居は一辺が11mを越える大型のもので、壁溝内に土留めの板材や杭の一部が残るなど、当時の竪穴住居の構造を知るための良好な資料を提供してくれました(図3)。この住居は、大型で周囲に側柱のあることなどから、壁構造をもつ住居であることがわかりました。また、住居内の土壌から暗渠の排水溝が延びることなど、一般の住居とはやや異なる規模と構造をしています。これらのことから、ムラの中の集会所や共同作業場といった性格の竪穴住居であると考えています。(出口 勲)